緒言

マリリン・ストラザーン教授は一九八九年に、ルイス・ヘンリー・モーガン講演において講演を行った。包括的題名は、「アフター・ネイチャー――二〇世紀後期におけるイングランドの親族」であった。そのうちの四つの講演は、「多様性と個性」、「親類――多元的文化を表すアナロジー」、「諸人格――上流社会の進歩」、そして「温室効果」であった。それらは、二月一四日、一六日、二一日、そして二三日になされ、適度に修正を施した形でここに刊行するに至った。

本書は、ストラザーン教授が二〇年以上にわたり取り組んできた業績を継続するものであり、その展開は、いくつもの著書や多くの論文の中に見出される。彼女の取り組みの範囲は極めて広く、民族誌的にはイングランドからパプアニューギニアへと及び、多くの中心的な理論的問題に関わっている。英国人類学に語るべき新しいことなどほとんど何もないと結論づけようとする人類学者は、彼女の業績を目にしてきっと思い直すことになるだろう。というのも、スト

ラザーン教授は英国社会人類学の中にしっかりと軸足を置きながらも新しい地平を切り開いているからであり、それが最も明らかなのが、この場だからである。

本書は、ストラザーン教授が取り組んでいることの魅力――と同時にその複雑さ――を明確に示している。この草稿の多様な読者が、それを多様な仕方で特徴づけてきた。しかし、それを単にカテゴリー化することは、結果として誤りとなるに違いない。これは、広く受け入れられているカテゴリーに整然と収まるような業績ではなく、それを分類整理しようと試みれば、その示唆が不明瞭になるだけである。

とはいえ、提示された鍵となる要素のいくつかを押さえておくことは重要であろう。ストラザーン教授の主要な関心は二〇世紀後期イングランドの親族であり、彼女の説明は文化的な用語で彩られている。彼女の題材を解明するためにイングランド以外の地域、特にメラネシアから多くの民族誌的データが、イングランドのデータとの関連で（そして相互作用させながら）配置されている。結果として、洗練され啓発に富む力強い比較が、私たちに実演される。本分析において不可欠な別の要素は、親族関係についてのイングランド的諸観念が、イングランド社会の他の側面についてのイングランド的な諸観念と関わり合う仕方、そしてそれがどのように作用しているのかを例証していることである。入念に展開される二種類の――文化横断的な、並びにイングランド内在的な――比較の組み合わせにおいてイングランドの親族関係が提示されることで、イングランドの親族関係を解明するにはとどまらない。それが示唆するのは、イングランドの親族について、またより一般的な問題についても、私たちの諸観念を再考する必要性である。

本書は、英国人類学者によるイングランドの親族関係についての初の文化的説明として、人類学者一般の注目を引き付けることになるだろう。また、人類学の発展を注視している他分野

の学者もまた、これが十分考察に値すると認めることだろう。読者は啓発と刺激を見出すことになる。

民族誌としてであれ、複雑な理論についての魅力的な事例としてであれ（これらの曖昧さが除去されうるならば）、ストラザーン教授による本業績は、世界についての私たちの理解に、そしてそれを理解する方法に対する重要な貢献となろう。

アルフレッド・ハリス
ルイス・ヘンリー・モーガン講演

はしがき

本書は、文化的想像力の実演である――それは主題であるイングランドの親族と、私の実践（イネーブリング）技術〔問題の解決を可能にする技術〕である学問分野、つまり社会人類学の両方に関してだ。それぞれの擬人化（パーソニファイ）する慣用句に忠実になることで、諸観念がいかに振る舞うかを例証したいと思う。

私はわずかな先行研究からインスピレーションを得たことを認めなければなるまい。これから見ていくように、それらが扱っていた主題だけでなく、それらの解釈や分析も大いに活用する。それらは、人々が文化概念を用いて自らにとっての「文化」を明らかにする手続きに対して、私が抱いていた関心を例証するのに役立った。しかしながら結果として読者は、本研究における一次情報の位置づけについて注意しなければならない。イングランド人や親族についての所見は、分析的・解釈的作業から導かれた二次的な観察と民族誌的に連続したものとして取り扱われている。したがって、私が他の研究者から引用する議論は、文化的証拠について独自の負荷をはらんでおり、かつまたそれを例証してもいる。結果として、本書の説明は、さもな

ければ歴史的・社会学的データを構成するであろうものを組み込んではいるものの、その説明が歴史や社会学であると偽ることはできないし、また諸観念の歴史であると偽ることもできない。したがって、あれこれの人格の集合に対して態度や信念を明白に帰属させることを、人々が何を考え感じるのかについての研究だと誤解してはならない。

説明には、説明それ自体の限界がある。自国についての人類学者（アンスロポロジスト・アット・ホーム）に付きまとう問題は、その成果物が単に文化についての説明のようには見えないかもしれないということである。小さな民族誌や社会史やサブカルチャーの社会学は、おなじみとなってきた。しかし私がここで提供しているものは、それらのどの基準に照らしても方法論的なスキャンダルである。そうしたジャンルからの遠さよりも、むしろ不可避的な近さの方に問題があると言ってもよいだろう。すなわち、ポール・ラビノーが『フレンチモダン』（Rabinow 1989）の導入章において用いた言葉を借りるとすれば、「全体はあまりにも複雑に見えることがある一方で、部分はあまりにも単純に見えることがある」のだ。

ルイス・モーガン講演の当初の構成は、そのまま主な四つの章として利用している。アルフレッド・ハリス教授とロチェスター大学の社会人類学科の尽力で、私は本講演に招かれた。これまでその恩恵にあずかってきた人々と同様に、私もまた彼らのホスピタリティに感謝している。グレイス・ハリスとアルフレッド・ハリスの特別な親切に、そして学科の激励に対する謝意を表明するにとどめておきたい。それ自体が特権でもあるのだが、時間を延長し批判的態度でもって、人類学科のメンバーや、バージニア大学の女性研究のメンバーもまた、本講演のすべてに参加してくれた。

本書が完成したのが、一九九〇年六月であったことも、付け加えておくべきだろう。その後、しばしば言及される『ウォーノック報告』は、法制化の基礎となったのだが、本書の中ではそ

のことについては触れていない。また、英国の首相職についても変更があった。当初の文章を維持することに努めてはいるが、少しおかしいと感じたところには適切な修正を加えている。

同僚の何名かには本書の原稿を読んでいただいた。彼らからの暖かいコメントや批判に感謝している。アンソニー・コーエン、フレデリック・デーモン、ジャネット・エドワーズ、サラ・フランクリン、ジェーン・ハギス、エリック・ハーシュ、フランシス・プライス、ニジェル・ラポール、ティム・スウィンドルハースト、ニコラス・トーマスらには、出版社の編集作業員として読んでいただいた。また、ジェーン・アシュトンには、比類なき仕方で注意深くご覧いただけた。さらに、参照文献における「n.d.」表記の文献については、未刊文献であるにもかかわらず、引用許可をいただけたことについても感謝していることを付け加えておきたい。

デイヴィッド・シュナイダーは、本書の人類学的な父である。というのも、賛成するにせよ、反対するにせよ、本書における親族についての諸観念は、彼から引き継いだものだからである。彼の反応は、性格上痛烈かつ寛大であった。もう一人の同僚ジョイス・エヴァンスは、本書の母である。なぜなら、私が描いたイングランド性は、彼女から引き継いだものだからである。一九世紀および二〇世紀の文学に対する彼女の愛情と知識によって、私は絶えず文化的であることができた。彼女はまた字義通りの意味でも私の母であり、子としても感謝している。

マリリン・ストラザーン

一九八九年一月／一九九〇年六月、マンチェスター